

2014年度 卒業式式辞

中京大学学長 北川 薫

中京大学で学び、本日ここに、めでたく卒業式を迎えられた学部卒業生の皆さん、ならびに大学院で修士あるいは博士の学位を取得された皆さんに対し、教職員を代表して心からお祝い申し上げます。

また、ご子弟の卒業を待ち望んでこられたご父母や保護者の皆様の喜びもいかばかりかと拝察いたします。今日までの慈しみに対して心からの敬意とともに、大学へ賜りましたご支援に感謝を申し上げます。そして、ここにご列席の方々と一緒に、卒業生諸君の希望に満ちたこの日を、晴れやかな気持ちでお祝いしたいと存じます。

中京大学は本年度（二〇一四年度）、開学六十周年でした。皆さんは、記念すべき開学六十周年の卒業生として、諸先輩に勝るとも劣らぬ気概を持って羽ばたいていただきたいと思います。これまでも私は「中京大学の歴史は、留まることのない挑戦と改革の歴史だ」と申し上げてきました。

母校に脈々と流れてきた「挑戦と改革」の精神を堅持し、皆さんが置かれる新たな環境を革新・発展させていくことを切に希望しています。

さて、十八世紀の哲学者・カントは『啓蒙』とは何かを問い、「人間が自ら招いた未成年の状態から抜け出すことである。」「未成年の状態とは、他人の指示を仰がなければ自分の理性を使うことができないということである。人間が未成年の状態にあるのは、理性がないからではなく、他人の指示を仰がないと自分の理性を使う決意も勇気も持てないからである。」として、「知る勇気を持て」と言っています。

大学での学びや仲間との交流で培ってきた知識や理性、情熱こそが新しい環境での羅針盤となります。勇気を持って、進んでください。

時代は、今、大きな節目にあります。二十世紀は第一次、第二次の両世界大戦がありました。その後も東西冷戦があり、まさに「破壊と戦争の世紀」でした。人々は二十一世紀に大きな希望を抱いたのですが、九・一一の同時多発テロで新しい世紀は幕を開け、アフガニスタン、イラクとテロへの応酬が続き、二〇一五年になってもIS（イスラム国）による残虐なテロが頻発し、恐怖の二十世紀を引きずったままです。

世界の各地で平和を求めて諍いが続いています。平和は誰もが望むところです。問題は、平和の在り方が違うのです。個人ごとにも違いますし、民族によっても違います。日本人が望む平和は、他の国が考えている平和と決して同じではないでしょう。

私が申し上げたいことは、同じ目標を掲げていても思いは同じではない、ということです。そのためには、「話し合うこと・相手を知ること」が最も大事ではないでしょうか。それが、また民主主義の根幹でもあるのです。

「破壊と戦争に明け暮れた長い二十世紀」は、戦争やテロではなく、人々の希望と平和で終わらせなくてはなりません。私の世代では成し得なかった反省を込め、その担い手が、今日、中京大学を卒業していく諸君たち若者であってほしいと願っています。

いつの時代でも、若者は時代を動かしてきました。世間を知らない若者、とよく言われますが、そうではありません。世間を知らないからこそ社会を動かせるのです。明治維新の一大勢力となったのは、都から遠くにあり、旧来の権威に囚われない「世間知らずのよそ者」でありました。ある意味では、一途に進む「馬鹿者」でもあった「若者」だったのです。しかし、戦争の時代では、理不尽さを一身に背負い、過酷な運命にさらされたのも、また若者でした。君たち若者に時代の盛衰、希望や平和の帰趨は託されているのです。

ヒト・カネ・モノが国境を越えて、自由に行き交うグローバルな時代と言われます。しかし、領土を画す国境の多くは、人為的に勢力圏を示したもので、古来、ヒトはモノとカネを携え、国境を越えて行き交っていました。己と相手の過不足を補い合い、物的・知的生活を豊かにするためでした。交通通信手段の飛躍的な発達に比例して、頻繁かつ大規模化したのが今日にみられるグローバル社会と言えるのでしょうか。

グローバルの原点は、世界の多様性やお互いの自由を尊重し、互恵的であるべきと思います。本学が掲げる建学の精神、その実践としての四大綱は、①ルールを守る ②ベストを尽くす ③チームワークをつくる ④相手に敬意をはらう と教えています。意見は違っても相手を認め、敬意をはらい、人間としてのルールは守る。その上で意見の違う相手ともチームを組むべく努力をし、ベストを尽くして挑戦する。これこそ、まさにグローバル社会の原点であり、目指すべき方向ではないでしょうか。

さて、皆さんと同じく、私もこの三月をもって二期八年の学長任期を全うし、学長を卒業します。

一九七七年に本学に赴任し、まさに挑戦と改革の精神で本学が発展する姿を見てまいりました。そこより、大学の発展と卒業生諸君の活躍もあいまって、中京大学が社会での地位を確実にしてきた、と自信を持って答えることができます。

ここにいる大多数の皆さんは、東日本大震災の年に入学し、その痛みを目の当たりにして大学生活を過ごしてきました。まだまだ震災の爪痕は残っていますが、事態は好転しています。建学の精神にある四大綱を基礎として、挑戦と改革の精神で、ますますグローバル化する混沌とした時代を切り開いていってほしいと願っています。

皆さんの前途に幸多き道が開けていることを信じ、一人ひとりのこれからの健闘を祈って、私の贈る言葉といたします。

本日は、ご卒業、誠におめでとうございます。